

全国大学書道学会 令和4年度（静岡）大会 開催要項（第2次案内）

下記の要領で、全国大学書道学会 令和4年度（静岡）大会を開催します。ふるってご参加いただきたく、ご案内申し上げます。

- 1) 主 催 全国大学書道学会
- 2) 開催大学 静岡大学
- 3) 開催日 令和4（2022）年9月17日（土）
- 4) 大会会場 静岡大学教育学部 〒422-8529 静岡県静岡市駿河区大谷 836
- 5) 参加費 3,000円 *準会員（大学院生）は2,000円

6) 参加申込

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、出席者を予め把握しておきたいと思っております。下記フォームより 9月9日（金）12：00までに事前申し込みをお願いします。参加は本学会会員に限定します。また、接触の機会を減らすため、所属と氏名を書いた名札を名札ケース（各自ご用意ください）に入れてお持ちください。

[大会参加登録用 Google フォーム]

<https://forms.gle/xUupnYMa2nDyd4cU8>



こちらのQRコード
からも読み取れます

必ず事前のお申し込みをお願いいたします。9月9日（金）12：00まで

※フォームのお申し込みが難しい場合、開催大学までメールもしくはFAX・はがきにて次の情報をお送りください。
・参加ご希望の旨、ご氏名、ご所属、参加学会名、メールアドレス、連絡がとれる電話番号。

7) 日 程

● 9：00 受 付（人文学部大講義室前）

● 9：30～10：00 開会式・総会（会場 人文学部大講義室）

1. 開会のことば

2. 開催大学あいさつ

静岡大学教育学部 副学部長 村山 功 先生

3. 理事長あいさつ

永由 徳夫（群馬大学）

* 議長選出

[] ()

4. 議事

1) 令和3年度事業報告

杉山 勇人（鎌倉女子大学）

2) 令和3年度決算報告

尾川 明徳（筑波大学）

3) 令和3年度監査報告

山口 恭子（法政大学）

4) 令和4年度事業計画（案）

杉山 勇人（鎌倉女子大学）

5) 令和4年度予算（案）

尾川 明徳（筑波大学）

6) その他

5. その他

1) 学会誌・会報の発行について

角田 勝久（新潟大学）

下田 章平（相模女子大学）

- 2) 新入会員紹介
3) 次年度開催大学あいさつ [] ()
4) その他 事務局
6. 閉会のことば

●10:10 ~ 11:50 研究発表／午前の部 (会場 人文学部大講義室)

10:10~10:40 研究発表① 司会：小川 博章 (淑徳大学)
女性墓誌銘の用語の特徴と書風に関する研究
—北魏を起点とする作銘方法伝承の解明を中心として—
愛媛大学 教授 東 賢司

10:45~11:15 研究発表② 司会：佐々木 佑記 (五島美術館)
『定家卿筆道』の著述内容とその意義
総合研究大学院大学博士後期課程 福原 真子

11:20~11:50 研究発表③ 司会：尾川 明穂 (筑波大学)
『高野切古今和歌集』と『粘葉本和漢朗詠集』における仮名について
—〈无〉の仮名を通じて—
関西大学大学院博士課程後期課程 松本 美恵

●11:50~12:50 休憩 (60分)

●12:50~13:55 研究発表／午後の部 (会場 人文学部大講義室)

12:50~13:20 研究発表④ 司会：下田 章平 (相模女子大学)
日本書道史における「和様」の多義性の淵源
—近世書論の比較検討を通して—
東京藝術大学 助教 柳田 さやか

13:25~13:55 研究発表⑤ 司会：杉山 勇人 (鎌倉女子大学)
近世の学書における「撥鑑法」の受容と展開
群馬大学 教授 永由 徳夫

●13:55 ~ 14:05 休憩 (10分)

●14:05 ~ 15:25 大会記念講演 (会場 人文学部大講義室) 司会：草津 祐介 (東京学芸大学)

演題：大御所家康と書

講師：本多 隆成 先生

—ほんだ たかしげ 静岡大学名誉教授

大阪大学文学部史学科卒業、同大学院文学研究科博士課程を経て、静岡大学人文学部に着任、現在、静岡大学名誉教授。元放送大学静岡学習センター所長。文学博士。『近世初期社会の基礎構造 東海地域における検証』(吉川弘文館 1989)、『初期徳川氏の農村支配』(吉川弘文館 2006)、『近世東海地域史研究』(清文堂 2008)、『定本徳川家康』(吉川弘文館 2010) など著書多数。

●15:30 閉 会 閉会のことば 副理事長 小川 博章 (淑徳大学)

8) 学会誌への投稿

- ・研究発表後に、学会誌へ投稿される場合には、連絡先を明記した別紙とともに、完成原稿（3部）を11月10日（木）までに学術局長宛に送付してください。
- ・大会における研究発表を経ずに、学会誌に研究論文を投稿される際は、1次要項にならった体裁の論文要旨を9月10日（土）までに事務局長宛に送付・お申込みください。学術委員会の審議を経て、投稿の可否を連絡いたします。その上で、学会誌または学会ホームページ掲載の執筆要項を確認の上、完成原稿（3部）を11月10日（木）までに学術局長宛に送付してください。

(学術局) 〒950-2181 新潟市西区五十嵐2の町8050 新潟大学教育学部
全国大学書道学会学術局長 角田 勝久 宛 (025-269-9250)

9) 会員書作展

会員作品展を以下のように開催いたします。ふるってご参観ください。

- (1) 会 期 I 令和4年9月16日（金）～9月18日（日）10:00～17:30（初日は13:00～）
II 令和4年10月4日（火）～10月24日（月）9:00～17:00（土日は休館）
- (2) 会 場 I 静岡市民ギャラリー 第3室 静岡市葵区追手町5-1（静岡市役所静岡庁舎本館1階）
Tel: 054-221-1017
II 静岡大学図書館ギャラリー 静岡市駿河区大谷836 静岡大学図書館

10) 理事会【オンライン開催】

日 時 9月11日（日） 17:00～18:00 ※理事の皆様には別途ご連絡いたします。

11) 三学会合同懇親会 →感染拡大防止のため、残念ながら本年度は実施いたしません。

12) 大会会場への交通・宿泊・昼食について

〈交通〉JR静岡駅よりバス利用

＜JR静岡駅北口からの乗車＞

JR静岡駅北口のしずてつジャストラインバス8B番乗り場から美和大谷線「静岡大学」行き、「東大谷」（静岡大学経由）行き、「ふじのくに地球環境史ミュージアム」（静岡大学経由）行きに乗車し「静岡大学」又は「静大片山」で下車。美和大谷線「東大谷」（静岡大学を経由しないもの）行きに乗車した場合は、「片山」で下車。（所要時間25分、1時間に5～7本運行）

〈宿泊〉各自ご手配願います。

〈昼食〉各自ご手配願います。大学内の食堂・ショップ等は営業していません。大学近くにコンビニがあります。

昼食時は黙食等、感染対策へのご協力をお願いいたします。

13) 緊急時における対応について

緊急時（感染拡大・災害等）は、開催校との協議により大会を中止することがあります。その場合は、開催日前日の19:00までに全国大学書道学会ホームページ (<http://all-shodo.jp>) の全国大学書道学会公式ツイッター (https://twitter.com/all_shodo) にてお知らせいたします。ご確認をお願いします。

[お問合せ] ・研究発表、学会に関するお問い合わせ

全国大学書道学会事務局（杉山勇人／鎌倉女子大学／sgym-hyt@kamakura-u.ac.jp／0467-33-8211）

・大会に関するお問い合わせ

開催大学担当（杉崎哲子／静岡大学教育学部／sugizaki.satoko@shizuoka.ac.jp／054-238-4587）

本学会と併せて、下記の学会等が開催されます。（参加費はそれぞれに必要です）

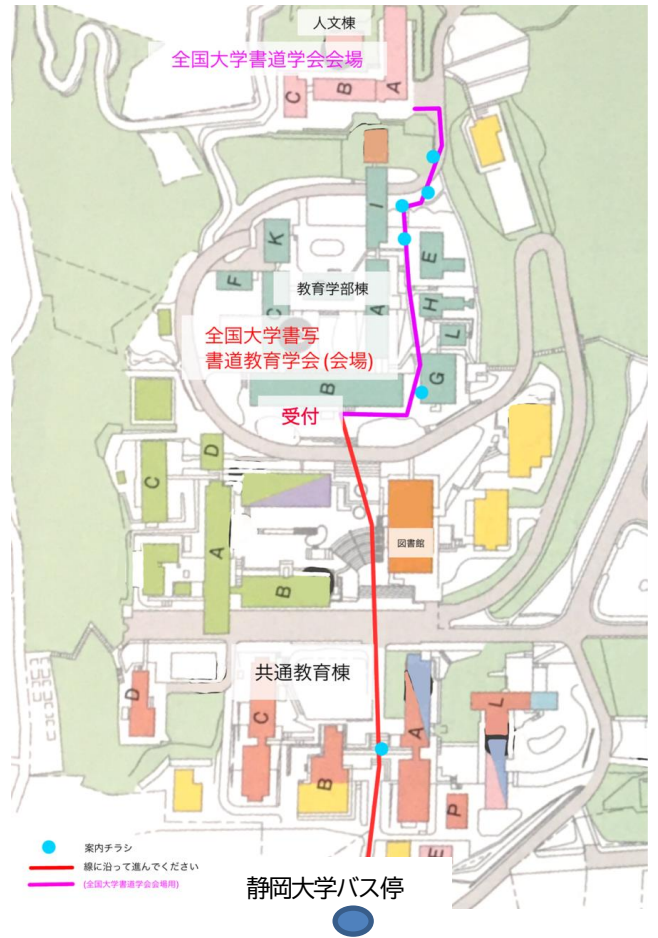
*9月16日（金） 13:30～16:30 日本教育大学協会全国書道教育部門

*9月18日（日） 9:00～16:00 全国大学書写書道教育学会

アクセスマップ

【大会：静岡大学】

【会員書作展：静岡大学図書館ギャラリー】



〈交通〉JR静岡駅よりバス利用

〈JR静岡駅北口からの乗車〉

しずてつジャストラインバス8B番乗り場から美和大谷線「静岡大学」行き、「東大谷」(静岡大学経由)行き、「ふじのくに地球環境史ミュージアム」(静岡大学経由)行きに乗りし「静岡大学」又は「静大片山」で下車。

美和大谷線「東大谷」(静岡大学を経由しないもの)行きに乗りした場合は、「片山」で下車。

(所要時間 25分、1時間に5~7本運行)

【注】キャンパス入構時点から

「教育棟」や「人文棟」までは、
上り坂や階段が続いています。

「静岡大学」バス停より、右方向(地図上)に、「正門」があります。
「静大片山」バス停は、これより下方(地図上)の、東名高速道路の
高架下にあります。

【会員書作展：静岡市民ギャラリー】



※静岡市役所 静岡庁舎 本館1階

〈交通〉

JR静岡駅から徒歩約10分

静鉄電車「新静岡駅」から徒歩約5分

しずてつジャストラインバス「県庁・静岡市役所
葵区役所」下車

令和四年度 全国大学書道学会（静岡）大会

研究発表要旨集

令和四年九月一七日（土） 於：静岡大学

研究発表① 10:10 ~ 10:40

女性墓誌銘の用語の特徴と書風に関する研究

—北魏を起点とする作銘方法伝承の解明を中心として—

愛媛大学教授 東 賢司

令和三年度の研究において、北魏時代の墓誌資料には、特に他の墓誌銘と語句が一致する資料が見られ、それを核としてグループを形成することは可能であるということが見えてきた。また、銘文の引用方法にも特徴が見られることも確認できた。しかし、この代表的とも言える作例は男性のものばかりであり、比較の方法に問題がないか検討を続けてきた。その結果、男性と女性の墓誌銘では、使用する文言に違いがある一方、洛陽遷都直後には女性のみで使用されていた文言が、後に男性にも使用されるものが頻繁に見られることも確認でき、女性から男性へ用語の伝承も行われているのではないかと可能性が出てきた。

北朝時期の女性の墓誌の数量は二百五十件を超え、男性に比べると圧倒的に少ないものの、文字数・語句数はそれなりのボリュームがある。墓誌銘は、伝統的に官職歴等を記載することがその中心であったために、それらの記載の少ない女性の墓誌銘には注目が集まりにくかったが、文言的な部分では千金の価値がある。

本論は、北魏の女性の墓誌銘の用語の検索を通じて、伝承する文言に男女差等の特徴が見られるのかを検証することを中心とし、また、女性としての墓誌銘の基準例設定が可能であるのかや、書的な共通性が見られるのか等の検討を行いたい。

研究発表② 10:45 ~ 11:15

『定家卿筆道』の著述内容とその意義

総合研究大学院大学博士後期課程 福原 真子

『定家卿筆道』は、藤原定家の特徴的な筆跡「定家様」の書記法を記す現在確認ができる唯一の古典籍でありながら、偽書であるという認識により、詳細な検討は行われていない。唯一のまとまった先行研究として小松茂美の論(一)が挙げられるが、本文の紹介と概要的な内容に留まっている。

しかし、『定家卿筆道』の文献調査を行ってみると、近世期における「定家様」受容の歴史とその広がりに関する貴重な資料であると判断される。また、記された内容については、春名好重が「このような説明だけでは定家流は書けない。この本の説明と定家様とは関係がないように思われる」(二)と述べているが、記述内容を読み込んだ結果、この評価についても再考の余地があるように思われる。

本発表では、まず国文学研究資料館所蔵本を底本とした翻刻を行い、釈文と現代語訳を示す。次いで記された用筆や点画の書き方など計十一項目について、書記法の解説を行い内容の明確化を試みる。あわせて従来まったく検討されることのなかった付図の意義についても考えてみたい。

『定家卿筆道』の内容を明らかにし、近世期における「定家様」書法の捉え方の歴史を辿ることを通じて、「定家様」という書記法が有していた書道的、また文化的意義の解明に及びたい。

(注) 一、小松茂美「定家の尊重と定家様」『日本書流全史(上)』(講談社・一九七〇年)六〇三頁

二、春名好重「藤原定家」『墨美二二九 藤原定家』(墨美社・一九六三年)二九頁

『高野切古今和歌集』と『粘葉本和漢朗詠集』における仮名について

—〈无〉の仮名を通じて—

関西大学大学院博士課程後期課程 松本 美恵

『高野切古今和歌集』と『粘葉本和漢朗詠集』における使用する仮名の種類と使用頻度について発表者が検証した結果、例えば「す」に〈春〉を多用していても「ほととぎす」と「うぐいす」の「す」が必ずしも〈春〉でないことや、「ほととぎす」「うぐいす」は共に名詞ではあるが「ほととぎす」「うぐいす」というように「す」に麩 春と異なった仮名使用が認められた。このように仮名個々の使用頻度からだけでは判断できない特徴や仮名の使用傾向について、語ごとの仮名列を検証することにより詳細な特徴が明確になるのではないかと考えた。鎌倉時期に近くなると〈无〉は「らん」「なん」という〈む〉と同様の助詞としての使用の他、〈と〉と連続して「とん／＼」と多用される傾向にある。『高野切古今和歌集』『粘葉本和漢朗詠集』にも用例が見られるが、これらの使用以外にも〈无〉の語における使用に特徴があるため検証を行うこととした。

検証の結果『高野切古今和歌集』『粘葉本和漢朗詠集』においては〈无〉は「とん」のような助詞としての使用以外にも動詞・名詞として多用されるという独特な特徴が見られた。更に第三種と『粘葉本和漢朗詠集』の同筆とされる写本間においては共通した仮名列が存在することも認められた。

本発表では書風に加えて語ごとに使用する仮名列にも共通性が認められれば同筆と判断する際に有効な指標の一つになると考えられる可能性について論じたい。【注】文中「」内は語や用例をへへ内は変体仮名を示す

日本書道史における「和様」の多義性の淵源

—近世書論の比較検討を通して—

東京藝術大学助教 柳田 さやか

今日、平安中期に活躍した小野道風・藤原佐理・藤原行成は三跡と呼ばれ、和様の書を確立したといわれている。また、「日本風の書」の意としてより広義に捉えられることもある一方で、法性寺流・青蓮院流・御家流などの日本の書流を指す語としても捉えられている。

和様の語は、彫刻史や建築史等においても用いられるが、古谷稔氏は「少なくとも書道史においては、具体的な定義は示されず、ただ漠然と日本風の様式を意味するものと見なされている」と指摘している。本発表では、この漠然とした和様の多義性の淵源を、唐様が興隆したといわれる近世の書論から探り、それが近代以降の書道史へ繋がっていった過程を探りたい。日本の書論においては、和様に類する語として、本朝様・本朝風・国風・日本様等の語が使用されてきた。これらの語に対して、和様の語は、近世において唐様の語の使用頻度が高まるにつれ、主に使用されるようになって可能性を検討したい。

また、和様の書の始まり——和様の祖について、近世書論においては三跡と捉えるものもあれば、尊円親王や空海と捉えるものもあり、論者の立場によって揺れがあったことが窺える。そのような中、「上代様」への復古意識の芽生えに関連して、三跡を和様の祖とする認識が徐々に強まった可能性、また、日本の書全般を和様の書と捉える認識もすでに一部では芽生えていた可能性をあわせて検討していきたい。

近世の学書における「撥鐙法」の受容と展開

群馬大学教授 永由 徳夫

わが国近世の書論を繙くと、当時の学書が「撥鐙法」「永字八法」「学書次第」を三鼎として成立していることが明らかとなる。これらはいずれも中国の学書に基づくものであるが、日本ではどのように受容され、展開したか、十分には詳らかにされていない。そこで、本研究では、「撥鐙法」を中心に、近世の学書観について考察を行うこととする。

「撥鐙法」は、唐・林蘊『撥鐙序』に初出し、後学によって馬鐙説・油燈説を中心に、さまざまに議論された執筆法である。この「撥鐙法」が日本に流入するや否や金科玉条の如くに信奉され、多くの書論で喧伝された。その様相は、本家中国を凌ぐほどに盛んに取り上げられたのである。

しかしながら、ある時期以降「撥鐙法」は論じられなくなり、日本で刊行された辞書類でも、「撥鐙法」は定説を見ないとして、重視されていない。辞典で例示される日本書論は、市河米庵『米庵墨談』程度に限られるが、本書で著述された「撥鐙法」は油燈説に拠るものであり、他の日本書論では圧倒的に馬鐙説が支持された。中国では油燈説が優勢で、日中における差異は興味深い。この顕著な特徴について辞書類では記述されていない。

『米庵墨談』では、「古人アニ足指ヲ以テ手指ノ伎ニ喩ヘンヤ」と馬鐙説を批判するが、米庵が油燈説を標榜することで、却って執筆法としての「撥鐙法」の存在自体が揺らいでいく過程を明らかにし、今日の書写書道教育において、「撥鐙法」がほとんど語られないことがない理由を考察したい。